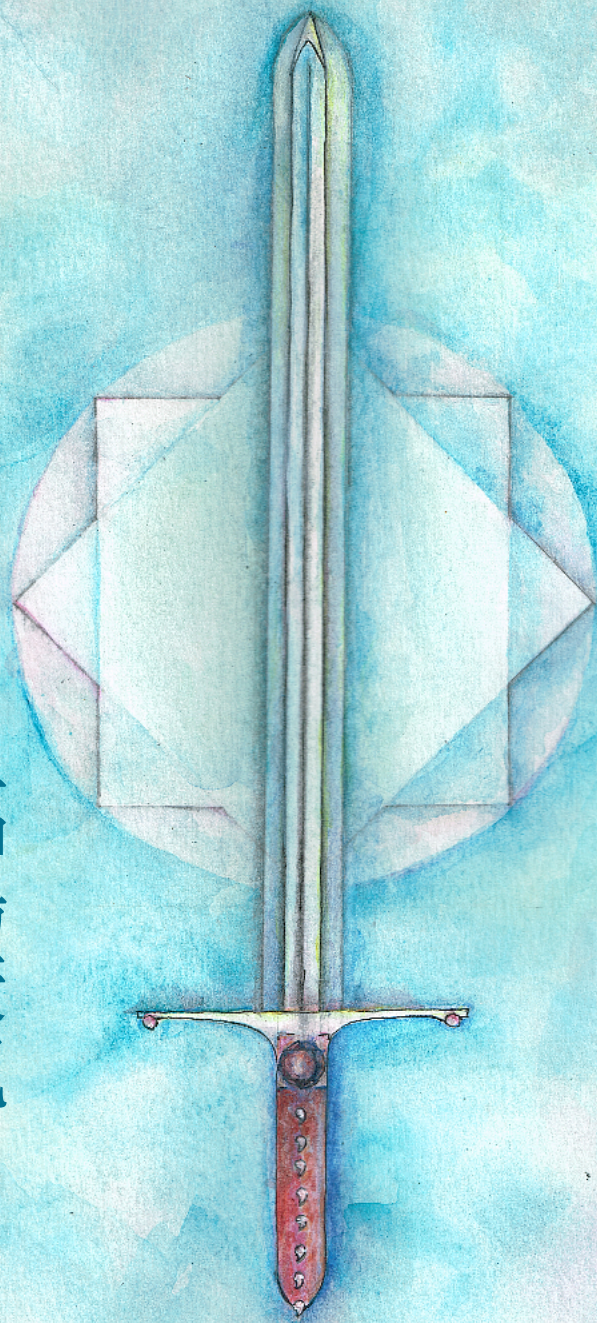


いつか見た風景

福嶋康紀



いつか見た風景

プロローグ

ここは、ある産院の待合室、深夜2時を少し回ったところ、よく見ると寝静まったにしては、少し妙なところがある。

時計が動いていない。

ここまでで、あつたら、その時計が故障しているだけとも考えられるが、動いているはずの自販機の音もしていない。

保育室の中の新生児の動き・声、夜勤の看護師の動きなども、すべて止まっている。

その全く音のしない空間に、青白い光と共に、十代後半から二十代前半の男女と共に、男の子と女の子の双子の赤ん坊が現れた。

大事そうに、それぞれ一人ずつ抱えられた赤ん坊は、待合室の椅子の上に予め置かれていた二人がすっぽりと収まるサイズのかごの中に寝かされた。

それぞれの子には、「ナギ」と「ナミ」と書かれた手紙が付けられていた。

愛おしそうにその子等を見つめていたが、覚悟を決めたかのような表情に変わると、彼らは、お互いを見つめ肯くと、先ほどと同じ青白い光に包まれ闇の中に消えた。

また、元の静寂が戻り、そこには、ナギとナミが残されていた。

元の時間の動きの戻ったところで、夜勤の看護師は、彼らを見つけ、びっくりした様子だったが、やがて、添えてあった手紙を見て、うなずくとあらかじめ用意されていた部屋の中にある保育器の中へ寝かしつけた。

彼女は、「これからしばらくは、私が、あなたたちを守ってあげる」と言っ
て、部屋を出て行った。

第一章 地方都市の小さな施設で

彼らは、すでに、中学生になっていた。

彼らが、過ごしたのは、東京などの大都会ではなく、九州のある地方都市だった。

なぜ彼らに養育費や教育費などの財産があったのかについては、彼らは全く知らされていなかった。

彼らは、自分たちの知らないところで、大きな組織によって守られていたのだ。

中学校は私立の学校で、共学であり、ここの設立者の名前は伏せられていた。

彼らの学校は、その都市の中心から少し離れた場所にあり、周囲にはいくつも学校があった。

いわゆる学園都市である。

彼らを通ったこの学校、校則らしきものは、ほとんどなかったが、昔からの伝統校であると言う事もあって、自由気ままで闊達な気風であるにもかかわらず、何か一線を守る保守的な哲学を持ち合わせた校風があった。

彼らの朝はいつも同じ光景が見られる。

彼らは、路面電車に揺られて、学校のすぐ近くまでやってくる。

電車を降りたら、あとは一直線

信号が変わるのを合図に誰かが

「よいいドン」

と言った。

一斉に学校の門目指して、数十人が猛ダッシュ、校門のところには、遅刻してくる生徒をチエックする当番の先生が待ち構えている。

門が閉じられたら、先生に生徒手帳を預けなければならない、預けた手帳は、担任を通じて返還されるが、しっかりと遅刻を出席簿に書かれてしまう。

門が閉まろうとお構いなしに、飛び越えてゆくものや門のところで急カーブを切って、赤レンガの塀の壊れているところを目指すものなど、この時間の数十人の徒競争は、このあたりの名物と化している。

ナギとナミもいつもの通り、猛ダッシュして、門を飛び越えていく、毎日これだから、その姿を見るために校舎の窓には、生徒の顔がずらりと並んでいる。

「ナギがんばれー」「ナミかっこいい」などこの学校は朝から、大盛り上がりになっている。

「ナギ、急げ」

「そっちこそ遅れるなよ、ナミ」

ボーン、ボーンと少し変わった音色のチャイムが始業の合図である。ガラガラと、教室の前から一時間目の教師が入ってきた。

既に二人は席についている。

「起立・礼」

「おはようございます」

「おはよう。今日も相変わらず、にぎやかな登校だね。神野兄妹は」

「先生。ナギが、寝坊するからいけないんです」

とナミが言った。

すると、すかさず

「今日は、ナミが寝坊したからじゃないか」

と反論した。

「ナギが昨日夜遅くまでしゃべってるから、いけないんだからね」

「勝手に寝ればいいじゃん」

「ナギが、隣のベッドから話かけといて、無視したら怒るくせに！」

話がエスカレートしてきて、周囲から浮いてきたところで、先生に軽くげんこつで頭をコツンと叩かれて、

「夫婦喧嘩は後でやれ」

と怒られてしまった。

そこからやっと授業が始まり

今度は、この二人によるショーを見ているような授業の開始、この二人運動も学問も二人そろってトップの成績なのだ。

先生の出番は授業のはじめだけ、すぐにこの二人によるその日の課題の掘り下げや展開そして結論とクラスみんなを巻き込んでやってしまう。

予め下調べなどしてくるようなタイプではないので、その場で二人で考え質問し答えを導き出してゆくのである。

おかげで、そのクラス皆、揃って好成绩を収めてしまうから、クラスのヒーローみたいになっちゃう。

授業を受け持つ先生なんかは、メモを取って次のクラスの授業の参考になっているくらいだ。

ここまでくると、彼らの出生や両親の事も知りたくなるのが人情だが、彼らも隠しては、いないしオープンにしているのので、「彼らは二人だけ」そんな存在だとクラスや学校全体も、そう思っ理解しているようだ。

彼らの学校は、中高一貫教育で、かなり成績は優秀だが、なぜか大学への進学率は悪い。彼らは、早くに目標を見つけて、そのことに邁進するので、受験勉強などと言ったものは、この学校にはない。

彼らには学歴など必要ではないのだろう。

今日も一日、充実した学校生活を送ったあと、彼らはそろってある施設に帰る。

ここから毎日学校へ通っているのだが、孤児院のような形をとっているが、公立でもなければ個人でもない、財団による運営をされている。

「ただいま」

二人そろって、いつもの帰宅の挨拶

「おかえりー」

と、返事をくれたのは、あの「守ってあげる」と言った看護師であった。

そう、ここはあの産院と同じ敷地の中にある施設なのだ。

第二章 梅雨

このところずっと雨が続いている。

外は、じっとりとした湿気が体にまとわりつき、実際の温度よりも数度暑く感じる。

しかし、この建物の中は、エアコンによっていつも快適な湿度と温度に保たれている。ここの事を孤児院と言ったが、実際には、彼ら以外の子供はいない。

この施設には、様々な年代の人が働いている。

中でも、彼らのお気に入り、彼らの親代わりになって育ててくれている幸枝さんだ。初めての出会いの時は、彼女は二十歳になったばかりの新人看護師だった。

その彼女も、今年で三十三になる。

「幸枝さん、何で彼氏できないの」などとナミは最近聞いてくるようになった。思春期になったのだろう。

「そうね。何でって、分けじゃないけど、いい人が現れないだけだよ」
と言って、優しい目を向けてくれる。

この時の幸枝の優しいまなざしが、ナミが一番好きだ。

幸枝の姓は、神野と言う。神野幸枝。

そう、彼女の姓と二人の兄妹の姓は同じなのだ。

彼女の子として育てられている。

彼女は、独身だが子持ちと言うわけだ。

若干二十歳にして、二人の子持ち・・・。

実は、彼女自身も孤児であり、この施設で育ったのだ。

彼女、幸枝は、看護師であるとともに、ここの施設の資金を出している研究施設の研究員でもあった。

小さな孤児院。

それは、この研究所を目立たないようにするためのカモフラージュでもあった。

ナギとナミの二人も、国家並みの力と財力を持った組織の研究所の一員として過ごしている。

彼らは、今のところ、特別な意識はなく、普通の十代、青春真っ盛りの中学生といった意識しかない。

友達とも遊ぶし、アイドルに憧れたりもする。

夕食をとりながら、テレビで流されるニュースに見入っていると、その中でこのところ降り続いていた雨による様々な被害の様子が写されていた。

「この頃の雨の降り方って異常じゃないのかな」

とナギが夕食のハンバーグに箸を入れながらつぶやいた。

ナギは、この幸枝さんが作ってくれているハンバーグが大のお気に入りだ。

「世界中で、異常気象や地震が、頻繁に起こるのは、地軸の傾きや惑星の位置関係による引力の影響だっていう人もいるよ。」

そうナミが言った。

「やっぱり世界一だなあ。我が家のハンバーグ」

ナギの頓珍漢な答えを聞いて、ナミは、

「そうだよハンバーグが原因で洪水が起きるんだよ」と言っ、ナギを睨み付けていた。

ナギは、しまったといった表情で、ナミを見つめている。

「あははははと」幸枝が大声で笑っている。

その光景を人が見ていたら、幸せな一家団欒に見えるだろう。

しかし、幸枝の目は、遠くにある何かを思い出しているようだった。

「それは、そうと、今日、学校から、あなたたち一回も授業に間に合ったことがないって、電話があったわよ。」

と、幸枝が二人の方を見ていると、ナギの方が

「そんな事ないよ。ちゃんと授業には間に合っているよ。出席点呼の時には、間に合っているし・・・なあナミ」

と同意を求めてナミを見ると

「そうそう、ちゃんと校門はジャンプで通り抜けるし、教室にだって、窓から入るのにひとまたぎ」

そこまで言って、幸枝が呆れているのに気が付いた。

「もうあなたたち、小学生じゃないのよ。」

「ハ―イ」

この年齢の子供にしては、素直な返事を返した。

その後は、他愛の無い話をして、風呂や歯磨きなどを終え、自分たちの部屋のベッドの上で、話し込んでいる。

「なあ、ナミ、思うんだけど最近の気象変動や地殻の変動って、今までの常識や科学では、説明が付かないような気がするんだ」

ナミにも思い当たる節があるようで、

「さっき、ナギに話したことは別に、なんだか、とても大きな力や、私たちの知らない世界でのことが、この世界に異変を起こしているような気がするの」

「こんな考え変かな」

「いや、実は、僕も同じことを考えていたんだ」

「僕たち双子だから、いつも大体考えていることってわかるよね。」

「この研究所での研究も、これらの事と何か関連があるのじゃないのかな」

「異次元空間に対する現在の次元及び時点から観察した関数の研究って、ここ以外のところでは扱っていないテーマだし、ここでの研究成果は、ここでの施設運用のための資金が集まる程度にしか、外部に対して出していないしね。」

「ここでの研究成果を理解できる人間が、ここ以外にいるとは思えないけどね」

「だから、この研究所は、免疫や再生医学の最先端の研究をしていると思われる」

「確かに。それもここでの研究成果だけど、そんなのここでの研究成果から見たら数百分の一以下のものではしかないのに、そのことは、世界には伏せているみたいだしね。」

「もっとも、今の世界では、使いこなせるとは思えないけど、ここで開発しているコンピュータやそのCPUなんかは、今、外に出たらパニックになってしまいそうだけどね」
「そうだね、全世界のコンピュータを総動員しても、この掌の上のマスコット型ロボットより性能が落ちるなんて、誰も信じないから、案外なんてことないかも」

子供の会話とは思えないような会話と共に夜は更けていった。

じめじめとした雨と暑苦しい夜が、その施設の外では、続いていた。
その会話をドアの外で幸枝は聞いていた。

「そろそろ、真実を伝える時が来たのかもしれない」

「あっという間の十三年間だった。あと二年で・・・」

第三章 梅雨明けまたは、初夏の時

七月の中旬になると、梅雨も終わりに近づき最後の雨を天の神様は降らせているようだ。今年は、例年になく雨量が多い。

おかげで、二人は、研究施設の中から一步も出られない。

学校の門の前で繰り広げられる朝のアクロバットも、ここ数日、披露できなくて暇を持て余している。・・・と云う事は全くなく、彼らは、連日、昨今の異常に対する討論をしている。

「地球規模での変化という枠組みでは、説明できないよ」
と、ナギが疑問を呈して

「確かに、そうだけど、太陽系や銀河系にまでその範囲を広げてみても、やはり答えが見つかるとは思えないよ」

と、ナミが答えている。

確かに昨今の様々な事象は、気象だけにとどまらず、人心までもその影響が及んでいる。人によっては、神の御業だと言って聖書にすがるべきだとか、コーランにすがるべきだとか様々な意見が世界中で飛び交っていた。

その時、彼らの部屋のドアを開けて入ってきた幸枝が、厳かに言葉を発した。その言葉を話す彼女は、ナギやナミたちの知っている幸枝の姿ではなかった。厳しい戦場を潜り抜けた戦士のような堂々とした姿がそこにはあった。

「今から話すことをよく聞いて、そして、びっくりしないでね。すぐには理解できないかもしれないけれど、真実なの」

彼女の話の内容は、このような事だった。

私たちの世界は、ずっと見えない力同士の戦いをつづけている。

・ ・ ・ その戦いが始まったのは、今から数万年もさかのぼる。

その時代には、神々という存在が、まだこの地球上にいて、人と共に異次元からやってくる幻魔というものと闘っていた。

神々は、一部の人間に自分たちの特別な力を授けることによって、幻魔たちをこの世界から排除することに成功した。

そこで神々たちは、この地球を人間に託し遠くの世界へと旅立っていった。

神々が去った後で、特殊な能力を持ったかつての戦士たちは、その力を背景に支配者となってしまった。

そのことは、決して神々と呼ばれた存在の望むものではなかったが、神々の気づくのが遅かった。

幻魔は、その者たちに甘い誘惑の力を使って、歪を拡大させていった。

そのことに気づいた神々は、かつて共に戦った戦士の中でまだ清き心を持っているものに望みを託し戦いを挑み始めたのだ。

その戦いは行く世代にもまたがり、幾重にも次元を飛び越え、今日まで続いている。

だが、この戦いに勝利しなければ過去にさかのぼって、すべての人類は、幻魔に支配されてしまうのだ。

しかもその戦士は、人の年齢で言えば、十五歳になった時からしか、その特殊な能力を発揮できない。

そのことを伝え終えた幸枝は、ゆっくりと二人を抱きしめた。

「幸枝さん、その戦士って、もしかしたら、僕らの事なの？」

そうナギが聞いた。

幸枝は、黙ってうなずいた。

「僕たちが双子であると言う事や両親を一枚の写真でしか知らないと言う事は、すべて繋がっているんだね」

「幸枝さんは。僕たちのお母さんのの？」

「違うわ、でも、正解に近い。私は、ナミ、あなたなの」
一体どういう事なのだろう。

ナギとナミは、互いに顔を見合わせて不思議そうな表情をしている。

「私が、幸枝さんって、どういうことなの？」

「ナミが、幸枝さん？」

ナギもナミもある程度の予測は着いたものの、その答えに戸惑っていた。

「あなたたちが、もうすでに予測しているように、私の本当の名前は、ナミ、あなたと同じナミという名前なの。いや、私はあなたの成長した姿なの、正確には、人格は別だから同じ人と云う訳ではないわ。」

ナギが口を開いた。

「ナミの成長した姿が、幸枝さんで……。ぼくの成長した姿は何故、今、此処にいないの……」

「あっ！ナギは、……」

そう言葉を飲み込むと、ナギは、静かにその場から離れ、窓から見える降りしきる雨を見つめていた。

それは、自分にこれから訪れる過酷な運命を想像しているようだった。

やがて、雨の降り続いていた空に、雲の切れ目が現れ太陽の日が差し込むように、「天使の梯子」が現れた。

「天使の梯子」は。雲の切れ目から指す日が連なる様子を表した言葉だが、その時のナギたちには、これからの使命を指し示す天からの啓示のように感じられた。

明るい日差しと共に、梅雨は明け、初夏の空気に代わっていた。

振り返ったナギの表情は、その自分の運命を受け入れた戦士のそれに変わっていた。

第四章 太古のナギとナミ

日本の古（いにしえ）の名を持つ、二人の若者

彼らは、かつて神々によって生み出された者だった。

人ではあるが、人ではなく、神でもあるが、また神でもない

彼らの生み出された経緯はこうであった。

国生みの神と云われるのは、彼らではなく彼らを生み出した神々の事であった。

混沌を鋒でかき混ぜたとあるのは、この宇宙がまだ生まれて間もないころの事である。

いくつかの振動が集まり物質化していった。

そこから星が形成されるのには複雑な操作はいらなかった。

ただ秩序という名の数式があっただけだった。

数式は新たな数式のもととなり、次第に複雑な世界へと発展してゆくのを神々は見守つて

いればよかったのだ。

小さな物質は、数式に従って核を作り次第に周りのものを巻き込み回転を始めた。それは、

原子や元素・素粒子などと呼ばれるものの数億分の一の存在以下だったが、そこからすべ

ては始まり、次第に単純なものから複雑な物へと姿を変えていった。

それも最初の数式から始まったものの発展した形だった。

すべてが整ったとき、はじめて、神々は足りないものに気が付いた。生命がなかった。

そこで神々は、自らの遺伝子を細分化し必要な生命を作った。

しかし、いつまで待っても知恵を持った生命体は生まれなかった。

そこで、自らの写し身（クローン）を造り、この星に降り立たせた。少しずつ、知恵を学ばせるはずだった。

それは、ゆっくりと時間をかけてなされるはずだったのだが、神々の中には、学ばせるのではなく、与えることをしたものがいた。

そのことで、人は、おのれの欲望と闘う羽目になってしまった。

やがて、人の欲望は、新たなる神を作り出してしまった。

本来の創造の神ではない白い神と黒い神

これらの神は、元は一つの数式だった。

今でいうコンピュータープログラムのようなものだ。

愛の方程式と欲望の方程式の勢力争いである。

そう云った背景の中で、ナギとナミは、生み出された。

すべての命の源となる数式を持った白い神の化身として、生み出された半神半人だった。ナギとナミは、もともとは、一つの存在だったが、その命の時間が限られているために白い神は、二つの存在に分けた。このことによって、彼らは、自分の写し身（クローン）を自ら生み出し、自らの使命が、途切れることのないようにしているのである。

最初の戦いは、正しき者の勝利となりナギとナミに準じた存在を多く残し、ナギとナミは眠りについた。

残された正しきものは、次第に、欲望という方程式によって、数を減らしていった。

その欲望の方程式の創り出したものが、幻魔だった。

ここからは複雑である。

幻魔と白い戦士は、もともと同じ存在だったのだ

愛の方程式が、支配すれば白い戦士となり、欲望の方程式が支配すれば幻魔となる。

日本の神々と似ている。いや、日本の神々の伝承は、このことを言っているのだった。

荒れる神が守り神になったり、その反対に守り神が荒れる神になったり、太古より繰り返されてきた事をそういう言い伝えとして残していた。

かつて人々と神々は、協力して善い行いをすることを常としていたが、何時の頃からか良き行いを欲望によって誤らせてしまうようになっていった。

幻魔の生み出したものは、通貨だった。人々に生活に欠かせないものという思い込みを長い年月かけて浸透させていった。

それでも、この日本では、お金は基本的に汚いものだから、子供には触らせないようにしたり、お金の話をすることを戒めていたりした。

しかし、いつの間にかお金が目に見えにくいものとなり、働いた報酬としてお金をもらうのだから、お金持ちは偉いと言う思い込みを浸透させていった。

次第にお金を得る手段はどうでもよいことになり、お金を持っているものが正義という誤解を生み出した。

その事は、幻魔が、圧倒的な勝利を収めようとしている証でもあった。

そこで、神々は、かつての遠き過去にその使命を果たし、永久の眠りについた白い戦士の中で、最も遠き昔より清いものとして力を発揮したナギとナミをその戦いのために復活させたのだ。

そのために過去の時にも彼らは、ずっと戦っているという歴史になった。

そのことで、やっと保たれている世界というのが今の世界である。

彼らの武器は、慈しみの剣またの名を草なぎの剣こと天叢雲剣。神話に描かれたあの剣だ。しかし、神話に書き留められている姿とは、まったく違う。

この剣は、人を切ったり命を奪う事は出来ぬもので、邪悪を封じ込め浄化する。そして、慈しみの心によって、魂を浄化する剣なのだ。

ただ、この剣は、力を使うのに使い手の犠牲を求める。

すなわち自己犠牲の上に成り立つ力の剣なのだ。

魂を救うごとに少しづつ己の命を削られる宿命（さだめ）を持っている。

悲しい戦士、二人だけの残された白い戦士。ナギとナミ。

イザ（功德）という名が付く白い戦士

イザナギ・イザナミ

産むものと産ませるものという名前以外に功德をもつて、悪しきものを封じる名を持つ者、言い換えるならば、おのれの命と引き換えに邪気を払い魂を救う者たち、そんな名前を持った二人。

第五章 戦士となるために

彼らは、おのれの運命を素直に受け止めて旅立ちの日が来るまでに、多くの事を学び、多くの力を習得していった。

実際には、彼らは、もともと明るい十代の若者なのだ、笑いもすれば泣きもする。相変わらず、学校での生活は続けられていた。

あの日、自分の運命を知ってからすでに二年が過ぎ、二人は、すでに成長した姿となっていた。

知能は、彼らの生活している研究所にあるすべての研究結果を理解している。

体つきは、青年のそれにふさわしい成長を見せている。

ナギは、ナミよりも一回り大きく力強くなり、ナミは、その美しさを増していた。

二人共通しているのは、慈しみの心を大事にしていることだろう。

彼らの周りには、争い事はなく、街ゆく人々にもその影響は強く出ているようだった。学校から帰る道でも、

「ナギちゃん。ナミちゃん」

と、ひっきりなしに声がかかり、笑顔が絶えない光景が広がっていた。

「あの子たちを見ているだけで、笑顔になるねえ」

「ほんと、優しいんだよあの子たち」

「この町の自慢だよ」

「うちの子たちも、あの子たちを見てるから、いつの間にか優しい子になっちゃたみたいだよ」

街の会話も彼らが通ると、彼らの話で持ちきりとなっている。

しかし、世界全体としては。ますます幻魔の力が大きくなり、恐怖や暴力による支配が進んでいた。

孤児院という名の研究所に帰ると、彼らは、彼らの武器である天叢雲剣の使い方を訓練していた。

ただし、その剣はなぜか模擬刀だった。

本来、この剣一本であるとともに、二本でもあるのだ。

天叢雲剣の名は、天から授かった光を遮り曇らすものを払い封じ込める剣という意味から名づけられている。

また、もう一つの剣・草なぎの剣の名は、くさ（邪悪なもの）をなぐ（収める・封じ込める）という意味から名づけられている。

すなわち、二つとも同じ力を持った同じ剣に当て字をしたようなものなのだ。

何故二つあるのかといううと、彼らナギとナミの二人のために用意されたものだからである。

一人が欠けた場合には、それらは、一つの剣となり、戦い続けるからなのだ。彼らの戦いは、特別な戦い方である。

命を奪う敵というものはなく、相手の攻撃をかわすだけなのだ。

傷つける敵というものはなく、相手の攻撃を受け止めるだけなのだ。

邪悪な心のスキを突き、その剣で薙ぎ払う事で、その者の魂を浄化し邪悪な存在は剣に封じ込められる。その封じられたものは、浄化し新しい無垢な魂となって生まれ変わってゆくのだ。

そう云った戦いなのだ。

強靱な肉体と精神そして、何よりも深い慈愛の魂を身につけなければ、その剣を扱う事は出来ない。

「ナミ」

「どうしたのナギ」

「僕たちは、他の子と同じように、愛の証として生まれたのだろうか？」

「そうね。それは分らない。でも、そのために生まれてきた事だけは、分るわ」

「そうだね。父さん母さんって優しくかっただろうね」

「その答えが、分かる時が来るまで、いきているのかな？」

「何言ってるの？それ以外の答えなんか見つからないわよ」

「それもそうだね。ナミありがとう」

彼らには、旅立ちの時が近いことが分かっていた。

世界中で、理由のないテロやいわれのない殺人などが頻繁に起こり出している、

最初は、金銭がらみの事案が大半を占めていたのだが、何時しか、その事自体に云われがあるとは思えないものが現れだした。

昔は、憑き物が取り憑いたと言う事で、浄化する術を持ったものが、その任についていたが、今やそのことを信じる者さえ少数になっていた。

幸枝が、彼らに話があると言うので二人そろって、訓練を早く切り上げて待っていると、巫女の姿に似た衣に包まれた彼女がやってきた。

彼女は、二人を引き連れて地下のドアの入り口の前に立った。

彼女は、着ていた衣を脱ぎ捨てると神妙な面持ちで祝詞を上げだした

「あまねくこの日出る国の始めから、見守る神々よ。今この者にその力の源を譲る機が熟した。従いて、この門を開け給う事を願う。」

すると、その大きな門は音もなく開き、中にはこの次元とは違う空間が広がっていた。

「さあ、ナギ・ナミその箱の前に進みなさい。」

そこには金色に輝く長方形の箱が三つ並んでいた。そのすべてに鳳凰の飾りが、付いていた。しかし、その箱には、どこにもつなぎ目もなければ、蓋や窓のようなものはなかった。その鳳凰は、飾りではなく、彼ら二人の方を見つめしばらくたつとその箱から飛び立った。すると、黄金の箱は、蓋が開き中には、古代の人が鏡と言った円形のディスプレイのようなものと、勾玉と言ったエネルギーの集合体のようなものと、草なぎの剣または、天の叢雲の剣と言われた光の棒のようなものがあった。

剣以外はすべて二つずつあり、それらは、自らの意志で吸い寄せられるようにナギとナミのもとへ納まった。

劍は一つしかなく、幸枝は、説明を始めた。

「ここにある力の源の使い方は、今まで訓練してきたから十分に知っていると思うけど、劍については、今から肝心なところを話しますね。一度しか話せないから、よく聞いて」
「ここに収められていたものは、私とナギが使っていたものの、ナギと言ってもあなたではなく、あなたの前のナギね。言ってみればあなた方の父親みたいなもの、そう私は、あなた方の母親みたいなもの、クローンにすごく近いけど、世代ごとに知恵や能力が蓄積されてゆく部分では、親子に近いかも。ここに納まっていた力の源は、すべて魂の浄化のためにしか使えないし、本当の力を行使できるのは、劍だけ、そしてこの劍は、ナギとナミの化身ともいえる。今ここにあるのは、ナギの劍、そう草なぎの劍ね。もう一つの劍をあなたに託す。その劍が現れるとき私は消える。そう、これらの劍は、ナギとナミそのもの。だから、今は、二つの劍の魂は、この一つの劍の中に納まっている。私の魂がその中に入った時、初めてもう一つの劍が現れるわ」

「私は、戦う力がもう残っていなかったから。あなた方を守るため十五年前ここに来た。三年前にその劍が私の前に現れたので、ナギの命が尽きたことをそれで知ったわ」

「だから、ここ二・三年ほど邪悪なものが優勢になっていた。」

「この研究所で研究しているものを使う事で、時空をさかのぼり、あなたたちをここに保護していたの」

「私たちの戦いは、愛の証即ち慈しみの心を広めることで、世界の均衡を保ってゆくためのものなの、あなた方をそこに向かわせるのは、つらいけど、それが私たちの務め、分つてね」

ナギとナミは。幸枝を見つめ肯いた。

幸枝は、剣を持ち部屋の中央に進むと天に向かって、剣を高く差し上げ

「ナギ愛してる。今一度、あなたの元に」と言って、続けてこう言った。

「天の叢雲。いざ出でよ。今一度、草薙の剣と共に彼らナギとナミに力を貸し給え」

そういうと、まばゆい光に包まれ、彼女の姿は消えた。

そして、その部屋の真ん中に双子の剣が現れていた。

剣と言ってもそれは光の塊で、慈しみの光に満ちていた。

ナギとナミは、それを握りしめ、いなくなった幸枝の事を胸に思い出していた。

「幸江さん、いや、ナミさんナギさんの元へ行っただね。」

そうして、彼らは、十五歳の青年の姿をした白い戦士として、幻魔に戦いを挑むことになった。

第六章 日常の中の戦い

彼らの戦いは、殺生を伴うものとは全く違う。

相手を倒すわけでもなく、命を復活させるわけでもない。

事故や寿命で死んでゆく者たちは、彼らの先祖やそれに近い魂がその魂を迎えに来る。

ところが、幻魔によって汚された魂は、その者が寿命となってもその穢れが残るしその穢れたものによって奪われた魂は、穢れとなって残ってしまい、次の邪悪な幻魔を呼んでしまう。

ナギとナミは。それらの魂の穢れを勾玉の力で浄化しあの世へ送る。

幻魔そのものとなってしまったものは、その者が命を落とす寸前にその魂を浄化するチャンスがある。その時を逃さず天の叢雲の剣（草なぎの剣）で薙ぎ払う事が出来れば、その幻魔は浄化され清める事が出来るが、使い手の命を削ってしまう。

八咫鏡は、そんな戦いの姿をこの世のものから見えなように一種の結界を張るためのものである。

その日は、いつものように高校へ向かって歩いていった。彼らは、すでに高校へと進学していた。

いつも彼らは、二人でいる、いつ何時にでも役目を果たせるように備えているのだ。
お昼休みだった。

「ナギ、今日は昼食何食べようか？」

「そうだね、いつも日替わり定食だから、今日は、ハンバーグ定食にしようよ。」

「ナギは、本当にハンバーグ好きだね。」

「幸江さんの作ってくれたハンバーグ思い出すね」

「いまごろどうしてるかなあ？」

「きっと二人で幸せにしているとと思うよ」

そんな会話をしていると、クラスメートが割って入ってきた。

「幸江さんって誰？」

「僕たちを育ててくれた人だよ」

「ナギとナミは、いつも、二人一緒に双子の兄妹というよりは、恋人同士みたいに見えるよ」そう言われて、二人は、にっこりとほほ笑んだ。

「君たち二人を見ていると、こっちまできれいな心の持ち主みたいな気になるから不思議だよなあ」そういって、クラスメイトは、学食の順番待ちの列へ向かった。

「この学校の中みたいに世界中が平和だといいのにな」とナミが言う

「この学校は、敷地内がすべて結界によって守られているからね」とナギが答えた。

ナギが調べたことで解ったのだが、創設者の名前が伏せてあったのは。ナギたちの研究所によって創設されているからで、直接、名を知る事は出来なかった。

しかし、研究所に住んでいるのだから、メインコンピュータのデータバンクから、古い書物にその記載があることが分かり、研究所の書庫で興味本位に調べてみた。

日本書紀や古事記のもとになった書物よりさらに古い時代の書物に、この時代になる前にすべきこととして、ナギとナミの保護育成を目的とした学校・研究所・病院・保護施設などを元号が大正の時期に創設せよとあり、この学校を始めすべての施設の創立は、ナギとナミによることが分かった。

「そうね、まだ、こんなに幻魔によって汚染される前だったから、私たちに近い能力を持った人たちが多くいたみたいだしね。」

実はこの学校も、彼らの住まいである研究所の施設も上空から見ると、八芒星が書いてあるように樹木が植えられている。そしてそこに通じるすべての道には、鳥居が地下に埋められている。

「古い書物によると、イエスやムハンマドという人も白い戦士だったみたいだし、二人とも、今伝えられている姿とは、かなり違うみたい。名前も実際の名は残ってはいないし、後世の人の話から創作された部分が多いしね」

「二人とも自分の命を削って魂の浄化をしていったんだろうけど、彼らは、クローンを残せなかったのかなあ。僕たちみたいな存在がまだいるはずなんだけど」

「でも。テロが起こった場所に魂の浄化をし、あの世に運ぶ鳥の絵を描いたものが、置いてあったみたいだよ」

そんな会話の途中に、ニュースが飛び込んできた、

オリンピックのあっている都市でテロによる犠牲者が多数出た模様だ。

周りは、大騒ぎになっている。

早速二人は、手のひらを合わせ八咫鏡を呼び出し、異空間を使い、その事故現場に移動した。

そこには、見るも無残な姿になった犠牲者が、大勢横たわっていた。

「ナギ」と声をかけナミは、ナギの側によってゆき、たがいの手のひらに浮かぶ勾玉によって、一つ一つの魂の未練を取り除いていった。

次々に、その浄化された魂は、白い光に包まれて、鳥と云われるもの寄り添われ、次々と天へと昇ってゆく。

「ナギ、この人は、幻魔に取りつかれている」

そう言うのと、その惑わされたものは、体に巻き付けた火薬に火をつけた。

八咫鏡が、二人をその爆風から守るため結界を作った。

その火薬の爆発する直前にほんの一瞬だけ、幻魔が隙を見せたのをナギは見逃さなかった。天の叢雲は、結界の中からその邪悪な魂を切り浄化してしまった。これで、その幻魔は、次に広がることはない。

幻魔を浄化したことで、その現場にいた魂は、テロを起こした者たちの魂もその犠牲となった者もすべて、浄化し魂の救済は完了した。

「帰ろうナミ。少し消耗した」

「うん」ナミは、ナギの身体をそっと支え、自分の愛がナギの命を少しでも、補えるように祈った。

白い光が辺りを包み二人の姿は消えた。

そして、元いた学食に戻った二人は、その時系列を元に戻した。

「あれ、ナギ、なんか顔色悪いけどどうしたの？」クラスメイトが、話しかけてくれた。

「大丈夫、昨日夜更かししてたからじゃない」と、ナミが代わりに明るく答えていた。

クラスメイトが去ったあと、ナギの手をギュッと握るナミは、涙を流していた。

「泣くなよ。僕はナミが元気で居てくれればそれだけで、いいんだから」

「バカ」とナミは、小さな声でナギに聞こえないように言った。

数日過ぎれば、彼らの身体は、完全にもとの元気な高校生に戻る。

残りの命の長さとは、裏腹に・・・。

第七章 神写しの儀

ナギとナミは、世界中で起きるテロを中心とした災いの場に駆けつけては、勾玉や剣の力で魂を浄化していた。

「ナギこのところ少し変だと思わない」

「ナミも気づいていたのか。確かにこれだけ多くのテロや銃撃戦なんかがあるのに、幻魔に取りつかれた人がほとんどいない」

「このままで済むわけがないと思うけど、ナミはどう思う？」

「そうねこのところ私たちの命の消耗自体がないみたいな感じを受けるの、ナギと一緒に居られる時間が長くなるのは、うれしいけど、何か嫌な予感みたいなものがするわ」

「一度研究所の資料室に帰って、似たようなことがないか調べてみる必要があるそうね」
そう言って、二人は、早速次の日から、そのことについて膨大な過去の記録を読み返すことにした。

二人は、ある記述を見つけた。

（「ゼロと零」

0||0.0000000...「数学の世界では、ある仮定を想定することによって証明できるのだが、このことに違和感を持つ人は多い。

零||0.000000...「ならば納得できる。

ゼロと零は違うのだ。

ところが、何故か数学上は、先ほどの式が正解とされる。本来、虚構である金銭的価値を幻魔は、不安にすり替えてしまった。

数字の0を人の価値のゼロと同一視させている。

ゼロとは、すべてが無いという状態で、そのような世界は、この世には存在せず。

また、この世以外でも存在しない。

この世であろうとなかろうと、そのものが、存在している事実が、ある以上、何処にも、ゼロという状態はあり得ない。

ゼロと言う事、これは虚構の世界でしかありえない。

しかし、虚構そのものがある以上、その虚構さえも否定することになるため、ゼロとは、仮定上概念としてしか存在自体を許されないものとなる。

ところが零という概念は、限りなく少ない存在というものであるから、存在自体を否定する事が出来ないのである。零という概念では、零という存在が残るのである。これは大きな違いである。）

という禅問答のような記述だ。

「確かに、多くのものがゼロに縛られている気がする」

「日本のかつての戦闘機に零式戦闘機というものがあつたわね、初号機・ここから始まる新しいものの意味で零式となつているのよね」

「確かに、ゼロ式だと、戦闘機そのものが、ないと言う意味になっちゃうしね」

「零や無という者の持つ意味は、何もないと言う意味じゃなくて、すべてをそぎ落とした真実や真理を意味している。日本の文化はその上に成り立っているのよね」

「だから、よく日本の文化は、引き算でもものの真理を表現すると言うし、海外の文化は、足し算でものを表現すると言われるわ。その根本には、すべてをそぎ落としたときに真理が見えると言う考えと何もなくなってしまう喪失の状態になるとでは、かなり人の気持ちに与えるものが違うわね」

「何故こんな事をここに記述してあるのかしら？」

「0から遠ざかろうとする心は。不安や欲望といったものにつきまとわれているけど、零に向かって近づこうとすることは、心を強くしたり平穩にしたりするから、このことを知っていると言う事は、大事なことだと書き残したんじゃないかなあ」

「こうも書かれているよ」

（平穩なる時にこそ、次の時に備えよ、イザナギ・イザナミの名の意味を知り自らの行いをその名に従え）

この意味を理解するのには、少し時間がかかった。

「愛し合えってこと？」

二人で向かい合って戸惑っていると、今まで一度も起動したことのなかったプログラムが立ち上がった。

二人の目の前には、自分たちに瓜二つの男女が数え切れないほど、ホログラムとして現れた。「お前たちは人の形をしているが、人ではない神の写し身なのだ。互いに相手を慈しむ心で体を重ねよそのことによって、一つの存在となり、やがて、元の存在に戻った時に、その自らの後継となるものを、その手の中に抱いているだろう」

そう伝えられた。

二人は、その声に従いすべての服を脱ぎ捨て、たがいを引き寄せた。

すると、今までいた書庫は、結界に包まれ白き光に満たされて行った。

二人は、一つの存在となりその存在はやがて、数倍の輝きを放ち静かにゆっくりと元の姿へ戻っていった。

生まれたままの姿で横たわるナギとナミの間には、生まれてばかりの小さな次のナギとナミがスヤスヤと寝ていた。

これらの事によって、ナギとナミは、自分たちの生い立ちをすべて理解し、次にとるべき行動を理解した。

「今度の戦いは、二人で戦う」

そうナミは言い、自分の姿に生き写しのアンドロイド幸枝を用意した。

「幸枝さん、私たちは、戻ってこれないかもしれないけどナギとナミをお願いします」
そう言って、結界を張り自分たちが育った産院の待合室に現れた。

二人を幸枝に預け二人は、二つの剣を構え青白い光に包まれ消えていった。

アンドロイドは、それまでにあったナギとナミの一切の記憶をこの町から消し、かごの中で泣くナギとナミにこう言った。

「しばらくは、私が守ってあげる」

前回の神写しでは、ナギが時空をさかのぼって帰ってきたが、今回は、この幸枝に我が子を託して行ったのだ。

二人は終わらせるつもりなのだ。

第八章 災いと恐れと慈しみと

神々の国として、古来より結界の張られていた国に大きな災いがやってきた。それは、阪神淡路の大地震、新潟を中心にした大震災、東日本の大震災そして九州地方の大震災・それらの現場では、清き心の人の行いが貧しき心の人の行いに勝っていた。

しかし、少しずつではあるが、欲望に支配され、人の不幸に付け込んだ行いがあった。その綻びを糧に、幻魔は息を吹き返してきたのだ。

オリンピックでのテロの惨状を目の当たりにして。この国の人も一氣に不安を抱き始めた。今まで、株や経済の事など、さほどリアルに感じていなかった人たちが、まるで命まで取られるとばかりに怯え、いわれのない犯人探しを始めた。

治安がそれほど悪くなったわけではないのに、テレビやネットでは、そのような書き込みが多くなり、人はそれを鵜のみにしていった。

全く関係のない日本在住の外国人が、原因のように叫び出した。

つい先日まで、リベラルで人権擁護を看板に上げていた政治家まで、そのわけのわからない恐怖に駆られて、迫害に加担している。

「ナギ、もうこれ以上、ここでの戦いをしていても、手に負えないよ」

「ナミ、そうだな。やはりあれを使う時が来たな」

「覚悟はできてる。ナギと一緒にだから平気だ」

異空間移動装置の準備はすでにできていた。

かねてより、この研究所で開発の進められていた装置は、宇宙そのものを構成する仕組みの外側に移動するためのもので、神々の住む世界に移動できるものである。

そこは、意識や魂の世界、肉体の存在は、不可能となる。

ここに来たものは、もう二度と生き返る事が出来ない、文字通り命を削ることになる。

あの二振りの剣は、もともとその世界の存在だったのだ。

「行くよ」

二人同時にそう言って、剣を高く差し上げた。

次の瞬間、二人だった存在は。光に包まれた世界の中に浮かんでいた。すでに肉体はなかったが。白い戦士というのにふさわしい光の存在が、そこにあった。

二人の見つめる方向に、黒い邪悪な光があった。彼らは、一目見てそれがなんであるのかを悟った。「ナギ、幻魔だ」

「とんでもなく強力な真っ暗な光だ」

何度も何度も草なぎの剣と天の叢雲の剣を振り上げて、その邪惡なものを清めていったが、その剣そのものの命が尽き欠けてゆくのが、感じられた。それは長年共に戦ってきた友の死を意味していた。

ナギとナミは。最後の一突きこの一突きでこの剣の存在は尽きてしまうと言うときに、剣を鞘の納めてしまった。

そして、「友よさらばだ」と言い剣を置き、武器を待たずに幻魔に立ち向かっていった。

すると、剣は、自らの意志で鞘を脱ぎ捨て、ナギとナミをその後ろに押しやり、最後の戦いを挑みその存在は消えた。

ナギとナミは、友の死を慈しみ彼らのために祈った。

そして、すぐさま友の後追うように戦いの場へ戻っていった。

「もうこれで僕たちの戦いは最後だ。ナミ一緒に居られてよかった。幻魔を良きものに浄化出来ないかもしれないけれど、彼らを慈しもう」

「うん、ナギ、私も一緒に居られてよかった。幻魔を救いに行こう」

そう言って、二人の存在は、近づき最後の輝きを発し始めた。

幻魔に近づいたとき、それは初めてその正体を見る事が出来た。

彼らと瓜二つの存在がその中心にいたのだ。光は影であり、それはともに同じ存在だったのだ。ただ彼らの方程式が零をゼロと取り違い恐怖しただけだった。

しかし、このままでは、影が支配する世界になってしまいすべては、ゼロとなる。そう思ったとき、急に光が強くなりだした。

「父さん」

「母さん」

そこには、十五歳を過ぎたナギとナミが白い戦士の存在となって、ナギとナミに合流していた。

彼らは、十三歳になった時に幸枝からすべてを明かされ十五歳になるのを待って、すぐにあの異空間移動装置を使ってここにやってきたのだ。この二人が、やってきたことであの消えた剣は、新たに蘇りをしていた。この段階ですでに、幻魔は、払われすべては、零から始まることとなった。

すべての存在は、慈しみによって包まれた限りなく零に近い存在となりゆつくりと、時を刻み始めていた。ナギとナミだった存在もそしてその子等も白い光に包まれて移ろいゆく存在になっていた。その姿はまるで祝福に満たされた寝姿のようであった。もちろん幻魔と言われた存在も白い祝福に包まれた淡く安らかな存在になっていた。

あらためて神は宣言した。

「すべての真理は、零から始まる。正しき者よ、今しばらくの休息の後に、増えよ」

古より歌い継がれてきた歌にはこうあった

愛している

愛しきものを

慈しむものを

命尽きても

愛している

完

著者

福嶋康紀

二千十六年七月二十四日 発行

美工房

福岡市南区野間四丁目二十七ノ十七

この作品は、すべてフィクションです。何の事実にも基づいておりません。この作品には著作権があり、法律によって保護されています。作者に無断での改編・複製・販売はご遠慮ください。